

大菩薩嶺(2057m)へ

岩井 淑

5月31日(火) 曇

午前10時、大菩薩峠の登山口である裂石を出発する。

柿の木の若葉がとても柔らかそうだ。桐の薄紫色の花とムラサキツユクサの花も綺麗だ。20分程で「峠まで90分」の大きな指標が建っている丸川峠への分岐を左に分け、アスファルト道路から山道へと入る。

シジュウカラがツィツィツィジュジュとさえずり、ノリスがチョロチョロと動いたかともみるとサーッと杉の幹を登って行く。沢沿いの小径を風に吹かれて歩いていると、山吹の黄色やツツジの朱色が目にとまる。山吹の黄色の花や藤の白や紫色を見るたびに時間は30年もタイムスリップし、故郷の碓氷川で獲ったハヤやブンブン飛んでいるクマンバチのことを思い出す。

沢の水音をバックミュージックに鶯の鳴き声が聞こえ、ところどころに「植物採取禁止」や「キャンプ禁止」の掲示が目につく。このごろの山野草ブームで平気で植物を取っていってしまう人が増えたのだろう。山に咲く花はその土地の気候や地質や水などの自然環境の中で咲くものであり、山の環境の中でこそ可憐さも引き立つというものだ。春夏秋冬移りゆく厳しい自然の中でこそ、その花本来の姿が見られるものだと思う。

やがて登山道は沢の水音を脊に松林の中を丸川峠への急登が始まる。汗は額から落ち続け、落葉松の林を過ぎると再び岩の多い急登にかかる。周りの木樹はまだ芽吹いたばかりのものや、まだ芽の出ていないものも多い。遠くのほうからカッコーの鳴き声が聞こえてくるのを耳にすると、アレッ？ 木樹の芽吹きもやっと始まった遅い春の訪れなのに、もう夏鳥が渡って来ているのか、と思う。

丸川峠に着いたのは11時30分だった。

峠には木彫りで大きさが70cmと30cm位の托鉢姿の坊主と15cm位の石の地藏さんが立っている。これら3体の像は昔、この峠から大菩薩峠を越すのが大変だった頃、道中の安全を祈って祀られたのだろうか。

山小屋の周りに播えているレンゲツツジはまだ固いつぼみである。6月中旬から下旬にかけて鮮やかな黄色の原っぱに変身する姿が目にかぶ。見事な光景だろう。

丁度時間も昼時なので、握飯を食べていると大菩薩嶺から男性ハイカーが1人下りてきた。小屋の前では山小屋のオッサンと女性ハイカー1人が話し込んでいる。

20分程の昼食嫌休憩を終え大菩薩嶺へ向けて出発する。

朝方、晴れていた空は薄曇りから本格的な曇り空となり、雨が降らないように祈るのみである。まだちらほらと雪が残っている道を序々に登っていくわけだが、時たま雲に覆われ始めた嶺が見える。仲良く話をしながら登っていく50才台の夫婦を追い抜くと、「北尾根、嶺へあと7分」の指標。もうすぐだ。

11人のパーティで賑やかな2057mの嶺に到着したのは12時40分。登山口から

要った時間は2時間40分である。

嶺の頂上といっても雑木のなかで広さ20m*10m程の楕円形をしており、中央に昭和62年7月に立てられた千葉県立君津商業高等学校の『大菩薩嶺』の指標が残っている。部活動のひとつとして登った時の記念なのであろう。見通しは周りの木樹のためにきかないのだが、みるまにガスがまいてくる。

5分程の休憩の後、峠に向かう。

10分程歩いたかと思うと一気に視界が開けた。大きな岩場の雷岩だ。本来ならばここからの見晴らしは抜群なのだが、生憎なことに今日はガスがかかっている展望がきかない。唐松尾根へ下る道は熊笹の中にあり、下方からカッコーの鳴き声がさかんに聞こえてくる。もし晴れていたならばこの場所は絶好の昼食場所だろう。

薄ら寒い景色のさいの河原に着く頃、ガスは一層きつくなってきた。登山者が次々と積んでいったのか5m程の石積みに出会う。登山記念に1つ重ねてみたが、1m程の石積みならばいたるところに見受けられる。

晴れていたならば、どうということのない所なのであろうが、今日のようにあたり一面にガスがたちこめしていると「さいの河原」と昔の人が名づけたのもうなずける。

その「さいの河原」を通過し100m程登り返すと、中井貴一主演でNHKテレビの大河ドラマとして放映された『武田信玄』のタイトルバックのロケ撮影が行なわれた所である「親不知の頭」へと出る。さきほどの「さいの河原」のガスが嘘のようになくなり、見晴らしは抜群なためおもわず美しい山波をスケッチしてしまった。

「親不知の頭」を一気に下ると、介山文学碑が建っている大菩薩峠へ到着する。中里介山原作の世界最長の未完の小説である御存知『大菩薩峠』は、東映の時代劇映画が全盛期であった子供の頃に、片岡千恵蔵扮する机竜之助がチャンチャンバラバラやっているのをかたずをのんで観ていたことを思い出す。その峠に今、立っているのだ。30年も前の子供の時に観た映画の内容については断片的に覚えているだけなので、時間がとれたら原作を読み切りたいと思う。

介山文学碑は五輪塔で作られており、「名作発想の地 中里介山先生作 大菩薩峠 記念塔」と刻まれている。その文学碑の100m程さきに介山が小説の構想を練り、実際に執筆もしたことのある赤い屋根の介山荘が建っている。

今は登山者だけが通る峠道も、かつては甲州の塩山から武州の丹波を抜けて江戸へと続く裏街道の最大の難所であり、冬ともなるとこの峠を越せずに行き倒れとなった旅人もいたという。7人のパーティに挨拶をし、石丸峠に向かう。

針葉樹林の中の急登を登りきると熊沢山の頂上となるが、あたり一面は熊笹で覆われているので熊沢山を熊笹山と変名してもよいほどだ。親不知の頭から大菩薩峠までは消えていたガスが再び発生し視界は20m程になるが、熊笹の中につけられた道をたどって急坂を石丸峠へと下る。

石丸峠より道を右にとり、上日川峠に向かう。

ガスの中、視界はほとんどきかず20~30m位だ。

熊笹の生い茂るなかを横切って落葉松林に入る。30分程で林道にでくわすが、そのまま突っ切り上日川峠へ向かうと、しだいに沢からの水音が大きくなってきた。足元に咲く薄紫色のスミレの花がかわいい。

沢を渡ると登りとなるが、石丸峠からずうっと下りに慣れた足には少しの登りでもきつく感じる。道の右脇に高さ90cm、径50cm程の男性シンボルを形どった『二代目・石摩羅』が建っている。おもわずお見事と頭をなげてしまった。

今は廃屋となってしまった山小屋・大菩薩館の横を通って上日川峠に建つ長兵衛山荘キャンプ場にさしかかると、山菜取りのグループが山荘の人達と情報交換をしている。ここまで下ってくると、採石場のサイレンとハッパの音が聞こえてくる。大菩薩峠登山口の一つである「裂石」という地名は採石のために石を割るところからきたものであろう。

落葉樹林の中を歩いていると、上ではまだ固いつぼみであったツツジが花開き、明るい紫色が綺麗だ。登山道は大菩薩峠へのメインルートのためよく整備されているが、第1展望台と違いあまり展望のきかない第2展望台まで来た時、突然、アカゲラのドラミングを2度聞く。くちばしで幹をたたくドルルルルという乾いた音だ。幹径40cm程のクヌギの木をたたいていたが、しばらくすると枝に飛び移りコツコツやっている。

静かにうつむきかげんに咲いているミヤマオダマキを観ながら千石茶屋を通ると、茶屋の前方に「単独登山はやめましょう」の立看板が建っていた。横目でながめて朝方に丸川峠へと別れた分岐点へ戻って来ると登山口まではあとわずかだ。

1988, 5, 31, 記